

RETAILER ACADEMY NEWS

Jul 2019 | Bentley Motors Japan

コンセプトモデルEXP 100 GT発表 未来のラグジュアリーカーの原型へ



ベントレー モーターズは、創業からちょうど100周年を迎えた7月10日、英国クルー本社でコンセプトモデル「EXP 100 GT」を発表しました。このコンセプトモデルには、ベントレーが将来のグランドツーリングをあらためてイメージさせ、ブランドとしての考え方を具体的な形にしたものです。

単なるモビリティの枠を超えて、EXP 100 GTは、自分で運転する場合でも、自動運転技術によって運転される場合でも、オーナーのグランドツーリング体験を向上させるということを示しています。

EXP 100 GTは、ベントレーの純粋なDNAを受け継ぎ、インテリジェントで未来志向のお客様の要望に対するベントレーの深い理解に基づいて作られました。装飾の美しさだけでなく、創造的で並外れた人間の経験と感情をあらためて主張する手段として、人工知能 (AI) を取り入れています。

オール電化のプラットフォームの利点を活かして設計されたEXP 100

GTは、2035年の世界で走っているであると予想されるグランドツアラーを思い起こさせます。それは、ドライバーも乗員も等しく素晴らしい旅を楽しめるような、ラグジュアリーな体験を共有する世界です。このモデルの存在感と印象的なエクステリアのプロポーションは、ベントレーが過去に生み出してきた数々のグランドツアラーを彷彿させますが、これらのラグジュアリーな特徴は、過去を振り返るだけでなく未来へと導いてくれるものです。その結果、世界で最も人気のあるラグジュアリーブランドとしてのベントレーの立ち位置に見合った将来のビジョンが生まれました。

最新の注意を払って彫刻のように作られたキャabinは、触覚もラグジュアリーで乗員を包み込む調和の取れた環境を作り出しています。ここには、乗員のグランドツーリング体験を向上させるAIの「Bentley パーソナルアシスタント」がシームレスに組み込まれています。

サステイナブルなイノベーションも、EXP 100 GTの中心的な要素の1つです。5000年前のフェンランドオークや初殻をリサイクルして作っ

た外装の塗料、ワイン製造の副産物を転用した100%オーガニックのレザー風テキスタイル、英国の牧場で生産されたウールを使用したカーペット、インテリアの表面のコットンの刺繍など、厳選された素材により世界に向けたメッセージとして設計されています。これらがサステイナブルな未来のラグジュアリーを生み出し、未来のグランドツーリングカーの現実感をさらに高めているのです。

ベントレー モーターズのエイドリアン・ホールマーク会長兼CEOは、「100周年を迎えた今日、私たちはEXP 100 GTで、ラグジュアリーモビリティの未来が、過去の100年間と同様にインスピレーションと野心に満ちていることを示しました。ベントレーは、あらゆる旅と、旅をする全ての人々の生活を充実させ、これからもさせ続けます」などとコメント。デザインディレクターのステファン・シーラフは、「EXP 100 GTは、ベントレーが将来作りたいクルマを表現したものです。過去の象徴的なベントレーのように、このクルマは乗員の感情とつながることで、彼らが経験する素晴らしい旅の思い出を作り、守っていくことに寄与するものです」などと話しています。



EXP 100 GTの特徴

モビリティの枠を超えたラグジュアリー

— Design [デザイン]

イノベーションは、ベントレーのアイデンティティを失うことを意味するものではありません。EXP 100 GTには初めて100%ガラス製のキャノピーキャビンを採用しましたが、伝統的なノーズとボンネットの形状は変わっていません。フロントには伝統のマトリックスグリルがあり、これにはデジタルライトシーケンスが統合されています。ベントレーを象徴する筋肉質なハウンチもそのまま。丸型ヘッドランプも受け継いでいますが、かなり内側に配置されています。



— Experience [乗車体験]

金属やウッド、レザーと並び、光を4番目の重要な素材として用いています。大きなガラスルーフはプリズムを使用して自然光を集め、光ファイバーを介してキャビンに投影します。この光には、乗員の眠気や乗り物酔いを和らげる効果も期待されています。リアライトは、伝統的なリアランプとセンターにある馬の蹄鉄型を組み合わせたもの。シンプルな塗装パネルのように見えるこのセクションは、内側からダイナミックな光を投影することができます。

車内はAIの「キャプチャー」モードにより、外気を取り入れて五感を刺激し、渋滞時の汚れた空気から乗員を遮断します。このほか、リラックスして座れるようにシートが自動的に調整されるオートモードがあります。これは、ステアリングを配置した状態で運転席が前方に動くか、ステアリングを格納して運転席を後方に動かす機能です。さらに、Bentleyパーソナルアシスタントが、近隣でラグジュアリー体験ができるスポットや、風光明媚なルートなどの見どころをハイライト表示。安全性を向上させる疲労度の監視機能も備えています。



— Craftmanship [クラフトマンシップ]

ウッド素材には、スローデザインとサステナビリティを具現化した古代オークを使用しています。これは洪水で水没し、5000年もの間泥炭層の中で保存されていたフェンランドオークです。この素材の美しさに、日本の金継ぎからインスピレーションを得た技術を融合させました。シートの素材や刺繍には、英国の伝統的な技術を取り入れ、現代的な意匠との融合を図りました。

さらに、ラグジュアリーなエコマテリアルの未来を見据え、ワインの廃棄物から作られたテキスタイルを製造する業者と提携。有害な化学物質や織物の製造過程で発生する排水はなく、サステナブルな自動車デザインの境界線を押し広げることに成功しています。

そして、英国伝統のハンドカットクリスタルであるカンブリアクリスタルの職人とも協力。楕円形の音声動作型AIのコンソールが、20世紀の伝統工芸を最先端技術に応用したショーケースとなっています。



— Technology [テクノロジー]

EXP 100 GTのフロントガラスには、未知の土地を走る場合でもさまざまな情報が映し出され、ドライビング体験を補完します。また、ドライバーが「アクティブ」と「オート」のどちらのモードを選んでいるかに基づき、車内温度やシートポジション、その他の環境条件をモニターして究極の快適さを実現するバイオメトリックテクノロジーが採用されています。Bentleyパーソナルアシスタントも、顔の表情をモニターして体温や血圧といった健康状態に関する情報を提供します。シートにはマッサージ機能も付いており、要望に応じて筋肉を刺激することでグランドツーリングをサポートします。



— Powertrain [パワートレイン]

ベントレーのエンジニアは、未来のテクノロジーを継続的に評価し、その時点で利用可能な最適のソリューションを選択しています。EXP 100 GTは電動で、地球上にある限りある希少な資源を必要としない、排出物を極力出さず、環境への影響を最小限にとどめるよう設計されました。

このコンセプトカーの駆動システムは、35%軽量で50%もパワフルです。最高速度は300km/hで、4基のモーターはトルクベクタリングによる制御を可能としているため、エフォートレスにカーブを走り抜けることができます。

また、EXP 100 GTは、EVに期待されている以上のものを達成しています。より多くのバッテリーを搭載する（ゆえにより重くなる）ことは、効率的な自動車を製造するうえでのサステナブルな方法とはいえません。ベントレーはより高い電荷密度を確保するため、ソリッドステートバッテリーの技術を採用。車重を1,900kgまで減らすことに成功しました。



— Luxury Services [ラグジュアリーサービス]

ベントレーのパートナーによるグローバルネットワークにより、距離や目的地にかかわらず、素晴らしい経験を提供します。例えば旅行する場合、お勧めのホテルやラグジュアリーグッズ、栄養豊かな食事といったアイデアを提案するなど、ラグジュアリーサービスが旅行を思い出深いものにします。また、家族全員での旅行では、クラウド形式のゲームといったコンテンツですべての乗員が楽しめます。こういった素敵な思い出は、定期的に車両のAIライブラリに保存され、後に一緒に思い出を振り返ることも可能です。





ハイエンドモデルのラインアップを強化するBMW BMW 7 Series / BMW M8

BMWジャパンは、フェイスリフトしたフラッグシップモデルの新型BMW 7シリーズと、最上級ラグジュアリーSUVのBMW X7を2019年6月24日に発表・発売。翌6月25日には、BMW MのフラッグシップモデルとなるBMW M8を発表しました。セダン、SUV、クーペモデルの最上級モデルを一気に投入したBMWのニューモデルのうち、今回は新型BMW 7シリーズとBMW M8について紹介します。

新型BMW 7シリーズ

2015年にフルモデルチェンジされ、6代目となったBMW 7シリーズ。今回の新型モデルでは、同社のフラッグシップモデルにふさわしいラグジュアリー性と存在感を高めるため、デザインを大幅に刷新。非常に押し出しの強くなったフロントマスクが特徴です。

押し出しの強さが特徴的なエクステリア



2015年にフルモデルチェンジされ、6代目となったBMW 7シリーズ。今回の新型モデルでは、同社のフラッグシップモデルにふさわしいラグジュアリー性と存在感を高めるため、デザインを大幅に刷新。非常に押し出しの強くなったフロントマスクが特徴です。伝統のキドニー・グリルは従来型より約40%も大型化され、ヘッドライトはキドニー・グリルと連結するようなデザインになりました。その結果、これまでにない圧倒的な存在感を醸し出しています。



リア周りでは、細く水平に配置されたリアコンビネーションランプと、その上に装備された水平のクロームガーニッシュにより、優雅さを表現しています。

機能性を高めたインテリア



メーターパネルは、新たに12.3インチディスプレイを採用したフルデジタルメーターパネルを装備しています。また、より自然な言葉で機能やサービスを起動することができる「BMWインテリジェント・パーソナル・アシスタント」を搭載。ドライバーがシステム起動時の言葉を自由に決めることができます。標準設定の「OK, BMW」だけでなく、言いやすい言葉で呼びかけることができるため、親しみながら使いこなすことができます。

レベル2の高度な運転支援システムを導入



もうひとつのトピックが、「ハンズ・オフ機能付き渋滞運転支援機能」です。これは前方を注視することを条件に、高速道路での渋滞時に手放して運転できるようにした、レベル2相当の高度な運転支援システム。現時点では、ユーザーの要望に応じて、この機能を有効化するソフトウェアが提供される予定です。

強化された商品内容

プラグインハイブリッドモデルは、従来の2.0L 直4エンジンから新たに3.0L 直6エンジンを搭載して、BMW 745eに進化。BMW 750i / 750Li xDriveは、4.4L V8エンジンのパワーアップを行い、走行性能を大幅に向上させています。

■ 主なラインアップ	(消費税8%込み)
BMW 740i Standard	10,900,000円
BMW 740d xDrive Luxury	12,030,000円
BMW 745Le xDrive Excellence	15,500,000円
BMW 750Li xDrive M Sport	18,280,000円
BMW M760Li xDrive V12 Excellence	25,230,000円

BMW M8



2018年にクーペモデルのトップモデルとして登場したBMW 8シリーズ。今回はBMW 8シリーズをベースにしたBMW M社の新しいフラッグシップモデルとして、BMW M8が発表されました。すでに受注が開始され、納車は12月以降に順次開始すると発表されています。

BMW M5譲りのハイパフォーマンス



BMW M社が開発した4.4L V8 Mツインパワー・ターボ・エンジンは、シリンダーバンクの上を横切るクロスバンク型のエグゾーストマニフォールドを採用することで、素早いレスポンスを可能にしています。また、最高噴射圧力を高めたダイレクト・インジェクション・システム、サーキット走行を考慮したオイル供給システムの採用などにより、BMW M5と同じ最高出力600ps、最大トルク750Nmを発揮します。

サーキット直系の最新テクノロジーを搭載

BMW M5譲りのインテリジェント4輪駆動システム「M xDrive」は、エンジンの出力を前後に無段階かつ可変的に振り分けるだけでなく、左右の後輪間のトルクも最適化。さらにドライバーによる駆動力配分の設定も可能で、標準の「4WD」モードに加え、より後輪駆動寄りとなる「4WD SPORT」モード、DSCをオフにすることで完全な後輪駆動となる「2WD」モードも用意されます。

新たに採用された「M専用インテグレートッド・ブレーキ・システム」は、ブレーキ圧を電動アクチュエーターにより生成することで、より素早く正確な制御を可能にしたもの。「COMFORT」と「SPORT」の2種類のペダルモードが用意され、ブレーキペダルの踏み込み量を変更できます。

走行モードは、「ROAD」と「SPORT」の2種類を設定。「SPORT」を選択すると、前車接近警告、衝突回避・被害軽減ブレーキを除くすべての運転支援システムへの介入を無効にすることができます。

さらなる高性能版も用意



よりスポーティな走りに対応したモデルとして、BMW M8 コンペティションが用意されています。エンジンは最高出力が25psアップの625psとなり、エンジンマウントはより硬い専用品を採用。走行モードは、安全機能を含むすべての運転支援システムが無効になる「TRACK」モードが追加されます。外観では、キドニー・グリルやドアミラーなどがハイグロスブラック仕上げとなり、より精悍な印象をもたらします。



インテリアは、BMW M社のフラッグシップモデルにふさわしいアグレッシブさとラグジュアリー性を両立。カーボンファイバー製のインテリアトリム、新開発のスポーツシート、専用のセレクトレーバーなどで、Mモデルらしさを演出しています。

■ ラインアップ	(消費税10%込み)
BMW M8	22,300,000円
BMW M8 Competition	24,330,000円

COMPETITOR INFORMATION



ニューモデル	ポルシェ・カイエン E ハイブリッド
発表・発売日	2019年6月7日 予約受注開始
概要	・カイエンに追加されたプラグインハイブリッドモデル ・電気のみで23-44km、最高速度135km/hの走行が可能 ・3.0L V6ターボエンジン+電気モーターで合計出力462ps、最大トルク700Nmを発揮
車両価格(税込)	ポルシェ・カイエン E ハイブリッド：12,160,000円
デリバリー開始時期	—



特別仕様車	ランドローバー レンジローバー SVO デザイン エディション 2019
発表・発売日	2019年7月18日 受注開始
概要	・同社のスペシャル・ピークル・オペレーションズ (SVO) が設計・開発した「SVOデザインパック」を装備 ・各部を黒で引き締めたエクステリア。内外色は3パターンの組み合わせ ・ベースモデルは3.0L ディーゼルのRANGE ROVER VOGUE。15台限定
車両価格(税込)	レンジローバー SVO デザイン エディション 2019：18,747,277円
デリバリー開始時期	—



ニューモデル	ポルシェ・カイエン S クーペ
発表・発売日	2019年6月21日 予約受注開始
概要	・第三世代となったカイエンに新しく追加されたクーペモデル ・カイエン クーペとカイエン ターボ クーペの間に位置する主力モデル ・2.9L V6ツインターボエンジンは最高出力440ps、最大トルク550Nmを発揮
車両価格(税込)	ポルシェ・カイエン S クーペ：14,080,000円
デリバリー開始時期	—



特別仕様車	ボルボ V90/V90 クロスカントリー ノルディックエディション
発表・発売日	2019年6月11日 発売
概要	・ベースモデルはV90 D4 MomentumとV90 Cross Country D4 AWD Momentumで、各60台限定 ・パノラマ・ガラス・サンルーフ、harman/kardonプレミアムサウンド・オーディオシステム、ヘッドアップ・ディスプレイ、19インチ・アルミホイールなどを装備
車両価格(税込)	ボルボ V90 D4 ノルディックエディション：7,670,000円 (メタリックペイント) 7,690,000円 (パールペイント) ボルボ V90 クロスカントリー D4 AWD ノルディックエディション：7,970,000円 (メタリックペイント) 7,990,000円 (パールペイント)
デリバリー開始時期	—



ニューモデル	フェラーリ F8 トリブート
発表・発売日	2019年6月25日 発表
概要	・歴代V8モデルに対するオマージュとして、往年の名車のモチーフを取り入れたデザイン。 ・3.9L V8ツインターボエンジンは、488 ピスタと同じ最高出力720ps、最大トルク770Nmを発揮 ・0-100km/h加速2.9秒、最高速度340km/h
車両価格(税込)	フェラーリ F8 トリブート：32,450,000円
デリバリー開始時期	—



ニューモデル	モーガン・プラスシックス
発表・発売日	2019年6月15日 発売
概要	・エアロ8以来、19年ぶりのニューモデル ・アルミニウム製シャシーに木製ボディフレームを組み合わせた新設計プラットフォームを採用 ・340psのBMW製3.0L 直6ターボエンジンを搭載し、0-100km/h加速4.2秒、最高速度267km/hを発揮
車両価格(税込)	モーガン・プラスシックス：13,932,000円 モーガン・プラスシックス ツーリング：14,904,000円 モーガン・プラスシックス ファーストエディション ムーンストーン：15,768,000円 モーガン・プラスシックス ファーストエディション エメラルド：15,768,000円
デリバリー開始時期	—

MOTOR SPORTS



6月30日に米国・コロラド州で開催されたパイクスピーク・インターナショナル・ヒルクライムで、市販車部門に出場したコンチネンタルGTが、同部門の新記録を樹立しました。過去にこのレースで3度の優勝経験を持ち、「キング・オブ・マウンテン」の異名を持つリース・ミレンがステアリングを握ったコンチネンタルGTは、12.42マイル(約19.9km)のコースをわずか10分18秒488で駆け上がり、これまでの記録を8.4秒も短縮。スタートとゴールの標高差が1524mもあり、156ものコー

ナーをクリアしながら駆け上がる難コースにもかかわらず、平均速度は驚きの約112km/hでした。

ベントレーのモータースポーツの責任者であるブライアン・ガッシュは、「この新記録は、自動車の性能を押し広げようとする欲求と精神が、ベントレーの中心にあることを証明し、コンチネンタルGTの驚異的な性能を知らしめることができました」などとコメント。また、リース・ミレンはレース後に「ウェットで雪も残る2019年のパイクスピークでしたが、素晴らしいフィニッシュができました。市販車部門の新



記録を打ち立てることを目標にこの地にやってきて、本当に素晴らしい1週間となりました。大自然から私達に投げかけられた挑戦に対し、コンチネンタルGTは頂上まで力強く走ってくれました。ついに私達はナンバーワンになったのです」などと喜びを語りました。

1年前、このレースのベンティガがそれまでの記録を2分近く短縮する10分49秒9で市販SUV部門を制しましたが、今年の新記録樹立は、ベントレーの創業100周年に華を添えました。



100周年特別仕様車の最終章

コンチネンタルGT コンバーチブル ナンバー 1エディション by マリナー発表

ベントレー モーターズはこのほど、100周年特別仕様車のコンチネンタルGT コンバーチブル ナンバー 1エディション by マリナーを発表しました。この特別仕様車は、伝説のナンバー 1プロワー(1929年製)のオマージュで、世界限定100台のみが製造されます。

コンチネンタルGT コンバーチブルをベースに、ベントレーを象徴するレースカーを現代風に表現したもので、18金メッキのフェンダーバッジや、オリジナルのNo.1プロワーのピストンから取られた歴史的なピースを、ローテーションディスプレイの中央に組み込むといった特別な仕様でマリナーが仕上げました。ボディカラーはドラゴンレッドIIまたはベルーガのいずれかで、ルーフカラーはクラレットかブラックとなります。センテナリースペックやブラックラインスペック、カーボンボディキットが装着される他、フロントグリルには数字の「1」がペイントで描かれます。ベントレーのモータースポーツ黄金期の精神を凝縮したカプセルのようなビスポークのショーケースとなる1台と言えるでしょう。

エンジンはベントレーが誇る6.0リッター W12ツインターボTSIエンジンで、スーパーチャージャーを搭載していたオリジナルのナンバー 1プロワーのように、爽快で俊敏なパフォーマンスを提供し、現代の自動車デザインの頂点を表現しています。

1929年製のナンバー 1プロワーは、ブルックランズ・サーキットで1932年にコースレコードを樹立した伝説のマシンです。ドライバーはもちろんベントレー・ボーイズのティム・パーキン。この4 1/2リッターは平均時速137マイル(約219.2km/h)を記録し、その後2年間破られなかったというベントレーのレースの歴史におけるシンボリック的存在となっています。



COLLECTION

ファーバーカステルから 100周年記念のペンのセットが登場

高級筆記具ブランドのグラフ・フォン・ファーバーカステルはこのほど、ベントレーの創業100周年を記念したスペシャルエディションのペンのコレクションを発表しました。この「リミテッド・センテナリー」は、ファーバーカステルとベントレーのコラボレーション商品の第2弾で、万年筆、ボールペン、ローラーボールペンがラインアップされています。いずれも過去のスポーツカーを思わせる洗練されたブラックカラーが特徴です。パーツは全て金属製で、ペン軸にはベントレーの象徴的なモチーフであるダイヤモンドキルティングを思わせる意匠を採用。精巧なナールング加工が施され、今年製造される車両にだけ装着されるセンテナリースペックに用いられているセンテナリーゴールドで縁取られたキャップ先のベントレーの「B」ロゴなど、ベントレーブランドと100周年を強く印象づける仕様となっています。



PEOPLE

モータースポーツ責任者に ポール・ウィリアムズが就任

ベントレー モーターズはこのほど、モータースポーツ責任者にポール・ウィリアムズ(写真上)が8月1日付で就任すると発表しました。ウィリアムズは2008年にベントレーの一員となり、エンジニアチームでベンテイガやコンチネンタルGT、新型フライングスパーに搭載されているW12エンジンの開発や、2代目コンチネンタルGT3のV8エンジンの開発などを手がけてきたパワートレインのエキスパートです。ウィリアムズは、「ベントレーのモータースポーツを指揮していくことは、私のキャリアにとってワクワクする大きな第2章になるでしょう。ベントレーが2013年にモータースポーツに復帰したときからレースチームに帯同してきましたが、2代目コンチネンタルGT3は今年まだ勝利がありません。ブライアン・ガッシュと彼のチームが築いてきた“勝利する”というチームのマインドを受け継ぎたいと思います」などと意欲的にコメントしています。

なお、前任のブライアン・ガッシュ(写真下)は引退し、ベントレーを去ることが決まっています。1999年にベントレーに加わって以来、ガッシュは70年ぶりのル・マン復帰と73年ぶりの勝利などに大きく貢献。2013年のレース活動復帰後も、モータースポーツの陣頭指揮を執ってきました。



これからのモータースポーツ部門を率いていくポール・ウィリアムズ。



引退してベントレーを去ることが決まっているブライアン・ガッシュ。

オールホイールステアリング

6月に発表された新型のフライングスパー。その特徴のひとつが、ベントレーでは初採用となるオールホイールステアリングです。これは文字通り、すべての車輪、つまり4輪で操舵を行うというシステムで、「四輪操舵」もしくは、「4WS」と呼ばれるもの。今回は、その仕組みやメリットなどを紹介します。



四輪操舵（4WS）の仕組み

オールホイールステアリングは、前輪だけでなく後輪も操舵できる、四輪操舵（4WS）システムです。走行状況にあわせて後輪を操舵することで、従来の前輪だけの操舵よりも、走行ポテンシャルを高めることが可能となります。前輪と後輪を同じ方向に操舵するのを「同位相」、前後で逆に操舵することを「逆位相」と呼びます。後輪を逆位相に操舵すると、最小回転半径が小さくなり、小回りが利くようになります。逆に同位相に操舵すると、車線移動での安定性が高まります。また、コーナリングの限界性能も同位相に操舵することで高めることが可能となります。



緻密な制御を電動で実現

後輪の操舵角度はわずかなもの。後輪を動かす力は、走行中のタイヤにかかる力を利用するパッシブ式と、機械で動かすアクティブ式が存在します。パッシブ式は、ブッシュなどのゴムのたわむ特性などを利用したもので、動きはごくわずかであり、その分、効果も小さなものでした。フライングスパーに採用されたのは電動のアクティブ式で、速度域に応じて緻密な制御が可能となっています。低速域では逆位相に動き、敏捷な動きを実現。駐車も楽に行えるようになります。高速域では同位相に動き、クルマに安定をもたらします。

1980年代の日本車での採用と衰退

四輪操舵（4WS）のアイデアは古くからあり、パッシブ式は古くから欧州車などに採用されていました。日本車では1980年代にアクティブ式が広く採用されるようになります。ただし、「使いにくい」「走行中の違和感がある」というユーザーの声が根強く、定着することができませんでした。しかし、2010年代になり、欧州プレミアム・ブランドで四輪操舵（4WS）の採用が復活。技術が進んだことで、かつてのように「使いにくい」「違和感がある」という声が出ることはなく、徐々に採用する車種が増えているのが現状です。



日本では1980年代に日産スカイラインをはじめ、ホンダ車などにも広く4WSが採用されますが、「違和感がある」と嫌われて、普及しませんでした。

四輪操舵（4WS）のメリットとデメリット

メリット	<ul style="list-style-type: none">・極低速域で最小回転半径が小さくできる。・低中速域で回頭性が高まる（敏捷性が高まる）。・高速域で車線移行時・外乱時の車体の収束性が高まる（安定性が高まる）。・高速域で後輪のグリップが高まる（走行限界が高まる）。
デメリット	<ul style="list-style-type: none">・低中速域でハンドル操作に対する違和感が出やすい。・システムが複雑で高額・重量増になる。

プレミアムカーに採用が広がる

2010年代になって四輪操舵（4WS）の採用は広がっています。アウディやBMWは、大型セダンなどに採用。居住性に優れたロングホイールベースとしながらも、低速での取り回しの良さと高速走行時の安定性を両立しています。一方でポルシェやランボルギーニといったスポーツカーでの採用も拡大しています。こちらは快適性というよりも、走行性能を高めるために四輪操舵（4WS）を利用しているという違いがあります。



アウディのサルーンのフラッグシップ、A 8には四輪操舵（4WS）が採用されています。



BMWは7シリーズや6シリーズなど、数多くのモデルに四輪操舵（4WS）を搭載しています。



ポルシェは先代に続き、最新型の911にも四輪操舵（4WS）を採用しました。



ランボルギーニのアヴェンタドールSにも四輪操舵（4WS）が採用されています。